

「親指ネット」と若者の友人関係の変容

塩 森 継 紀
林 理

The Effect of the “Thumb Net” on Relationships between Young Adults

Tsugunori Shiomori Osamu Hayashi

In this research, we present the results of a survey of young adults regarding the way cellular phone usage has altered the concept of friendship. Each subject included in this survey completed a written questionnaire and was given a personal interview.

Survey subjects gave low importance to the fact that cellular phones allow another person to be contacted anywhere and at any time. Instead, they expressed the opinion that a more important function of cellular phones is to allow individual communication, or, as they put it, “you can contact a certain person easily.” When the life style of the current generation of young people is taken into consideration, a life style in which time is a less critical factor, the convenience factor of “anytime” communication is not so important.

Our survey showed that young adults exchange cell phone numbers readily but that exchange of e-mail addresses is limited to their closer friends. Historically, female students have been part of a letter-exchange culture, that is, they are accustomed to exchanging letters with friends and acquaintances and frequently do so. With the advent of e-mail communication via cell phone, female students have readily adapted to the new technology and now use e-mail as a substitute for letter exchange.

Many of those surveyed stated that sending messages is more important than receiving them; in most cases they neither require nor expect a reply. They view their communication as a monologue whose contents and meaning should not be taken too literally. Because sending messages in this monologue style can show an intimate part of their psyche, they are reluctant to send them to people other than their closer friends. For this reason they are cautious about giving out their e-mail addresses. They exchange cell phone numbers, even among members of the opposite sex, as a courtesy, and they recognize these people as “acquaintances.” From this initial level of relationship, they become progressively better friends with these acquaintances

by either initiating or receiving phone calls. This forms the basis of a selection process by which further choices are made.

However, these results show that these young adults support “shallow and wide” relationships, because of the fact that receiving calls is passive rather than active and allows another person to make one’s own choices. Thus, characteristically they have many acquaintances but few friends who could be described as close or intimate.

Many of our survey sample responded that “there have been no changes in my relationships with close friends since I began using a cell phone.” However, more research is needed to establish whether core relationships with close friends have been maintained without changes.

1. はじめに

いつでも、どこにいても、望む相手に連絡が取れる。昔ならSFの世界でしか実現できなかったことが、今は携帯電話のおかげで誰にでもできてしまう。

電子メール機能を含む携帯電話は、親指で手早く入力する様から「親指ネット」と呼ばれ、若者世代を中心にして普及は著しい。それにとともに若者の間では、友人との人間関係も、手紙と据え置き電話しかなかった親世代とは変わってきているという議論がある。その一つは、最近の若者の友人関係は「広いが浅い」。深い人間関係が築きにくい。浅い人間関係がやみくもに広がり、もめ事も多い。いつも一緒に過ごす友人の数は多いが、悩みごとなどの相談はせず、お互いに意識して深入りしないようにつきあっている。そのため、孤独感を感じている。このような若者が身体の一部と思ひこむほどの必需品となっているのが携帯電話である。しかし、深いつながりががないため、朝起きてから夜寝るまで友人とコミュニケーションをとろうとしている。友人関係を保つためには、まめに連絡をとることが重要と考えている。だから、携帯電話を使って、「朝起きたよ」「学校に着いたよ」「これから昼飯」といった、終始ささいな話をしている。そうしなくては友人関係を保

ち確認できない。彼ら自身も、そういう行動の中で人と親しくなるスピードは、とても速くなったけれど、友達ごっこをしているだけではないかという気持ちを持っているという見方である。他方、若者の友人関係は、「選択的」であるという松田の見方もある。¹⁾ 松田の見方を紹介する。携帯電話を利用している若者は、誰とでも携帯電話を通じてつきあっているのではなく、特に親しい相手との間でもっともよく利用されている。また、番通（発信番号表示）で相手を確認し、電話で応答するか決める。たまり場誰かが通りかかるのを待つのではなく、携帯電話で連絡をとって会うといった行動は、連絡をとる相手や直接会う相手の「選択」である。いつでもどこでも連絡がとれる個人専用の携帯電話で、今いる場所や現在所属している集団にとらわれず好きな相手、気の合う相手とつながる。これは「広いー狭い」、「深いー浅い」という軸でとらえるより、「選択的」と捉えるほうが適切であるという見方である。

携帯電話で結ばれている若者の友人関係は、「広いが浅い」なのか「選択的」なのか、あるいは他の見方があるのか。本研究では若者自身の携帯電話利用に関する態度調査から携帯電話による友人関係の変容を検討する。質問紙調査と面接調査を行い、両方から検討した結果を報告する。

2. 調査内容

2. 1 質問紙調査

2. 1. 1 調査対象及び調査時期

調査対象は、首都圏の文科系大学生140名、短期大学生99名、専門学校生74名の合計313名（男子学生168名、女子学生145名）である。

調査時期は、すべて2000年11月である。調査は授業中に授業担当者が配布し回収する方法によった。

2. 1. 2 調査項目

調査項目は、「対象者の属性」「居住形態」「コミュニケーションの利用ツール」「携帯電話の必要性」「携帯電話利用の頻度・時間・相手」「ワン切りの頻度」「携帯メール利用の理由・頻度・相手」「携帯電話の使用料・支払い元」「携帯電話に対する意識」「携帯電話で話す上での利用と満足の度合」に関する54項目である。これらの調査項目は、日吉、杉山の調査²⁾を参考に、さらに新たな質問を加えて作成した。

2. 2 面接調査

2. 2. 1 調査対象及び調査時期

調査対象は、首都圏の男子大学生3名と女子専門学校生6名について、それぞれ集団でおこなった。

調査時期は、男子大学生は2000年11月に、女子専門学校生は12月に行った。

2. 1. 2 調査項目

調査項目は、「いつ頃からどんな理由で持つようになったか」「持つようになって便利なおところはどこか」「持つ前の友人との電話、手紙の頻度は」「1日にかける回数と時間」「1日に出すメールの数」「1ヶ月で使用しない日数」「登録している友人の数」「固定電話、携帯電話、メールの使い分けはするか」「忘れて出かけたときの気持ち」「持つようになって友人関係に変

化があったか」の10項目である。

3. 結果

3. 1 質問紙調査

3. 1. 1 普段利用しているコミュニケーション手段

「以下にあげたコミュニケーションの手段のうち、あなたが普段お使いのものをお答えください（複数回答）」で回答してもらった利用ツールは、多い順に携帯電話90.5%、据え置き電話64.4%、パソコン13.3%、ファクス7.6%、ポケットベル6.7%、PHS4.8%である（図1）。これは携帯電話の圧倒的な普及率を示している。

「前質問であげたコミュニケーションの手段のうち、あなたが最もよく使っていると思われるものはどれですか」に対しては、携帯電話77.5%、据え置き電話7.3%、PHS3.8%、ファクス3.5%、ポケットベル1.0%、パソコン0.0%である。前質問で答えた携帯電話利用者285人のうち244人が携帯電話を最多頻度で利用しており、携帯電話の利用度が高いことを示している（図2）。

3. 1. 2 携帯電話がない生活に対する意識

携帯電話がない生活に対する意識（図3）は、携帯がない生活は「不安であり、持っていたい」が43.8%、「不安ではあるが、なくてもかまわない」が12.4%、「不安ではないが、持っていたい」が30.8%、「不安ではないし、なくてもかまわない」が4.4%であり、不安を感じるものが56.2%、必要性を感じているものが74.6%と携帯電話に対する依存度は非常に高い。

3. 1. 3 携帯電話電話の1日にかける回数および1回の通話時間

携帯電話電話の1日にかける回数（図4）は、5回未満が74.0%、10回未満が15.9%、20回未満が1.9%、20回以上が0.6%であり5回未満が圧倒的に多い。

図1：普段利用しているコミュニケーション手段(複数回答)

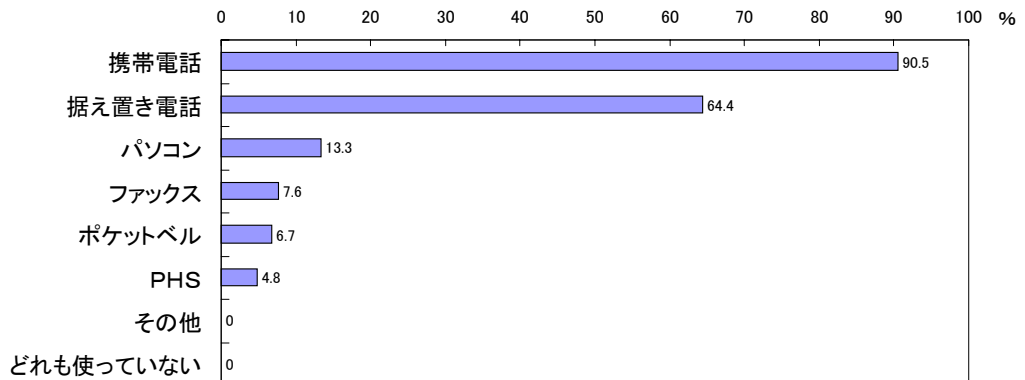


図2：最多頻度で利用しているコミュニケーション手段

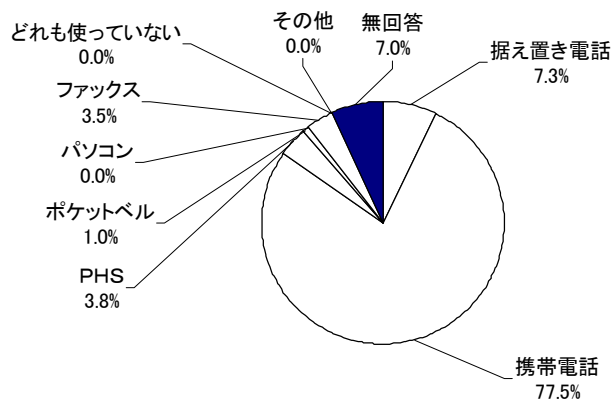


図3：携帯電話がない生活に対する意識

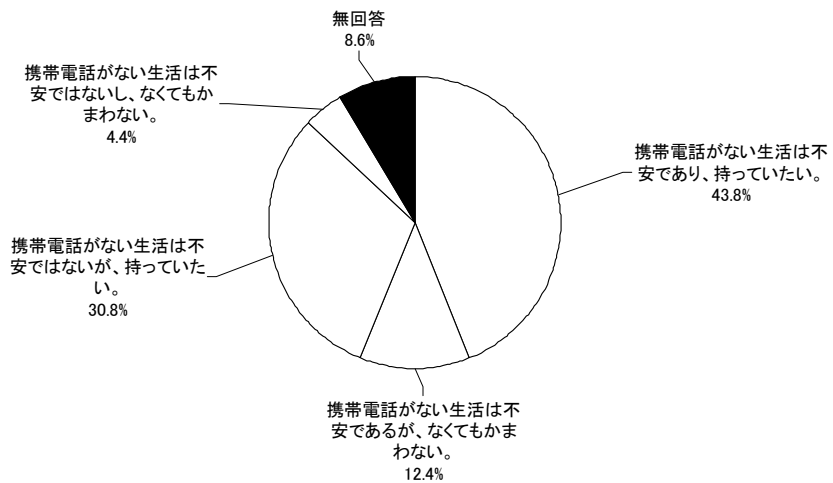


図4:携帯電話の1日にかける回数

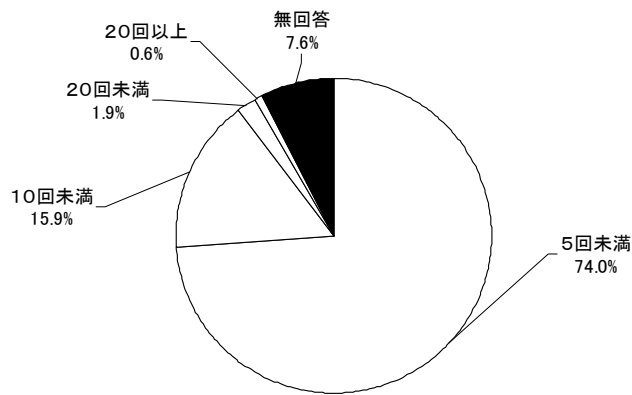
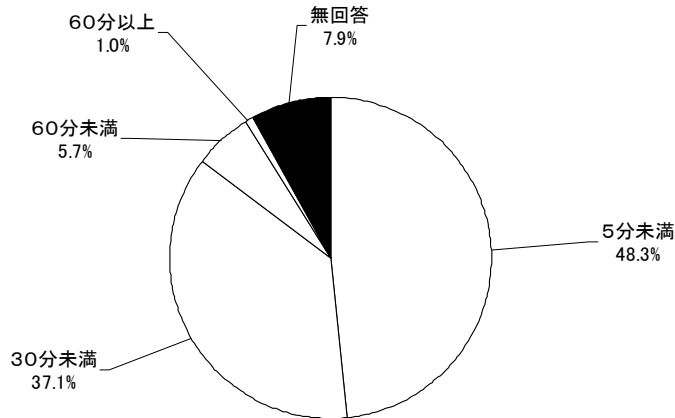


図5:携帯電話の1回の通話時間



1回の通話時間(図5)は、1回5分未満が48.3%、1回30分未満が37.1%、1回60分未満が5.7%、1回60分以上が1.0%である。1回5分未満と1回30分未満を合わせると85.4%となり、携帯電話利用者の過半数が1回の通話時間は30分未満である。

3. 1. 4 携帯メールの使用頻度

携帯メールの使用頻度(図6)は、男女全体では、よく使う58.4%、まあ使う21.9%、あま

り使わない7.9%、全く使わない4.8%である。男女別ではよく使うが男45.2%、女74.5%であり女子学生の方が圧倒的に多く利用している。

3. 1. 5 携帯電話利用に対する意識

携帯電話利用に対する意識(図7複数回答)は、「よく当てはまる」に1点「全くあてはまらない」に5点を与え、平均得点より高い項目は「長電話する方だ」「身近な人に電話で話すこ

図6：携帯メールの使用頻度

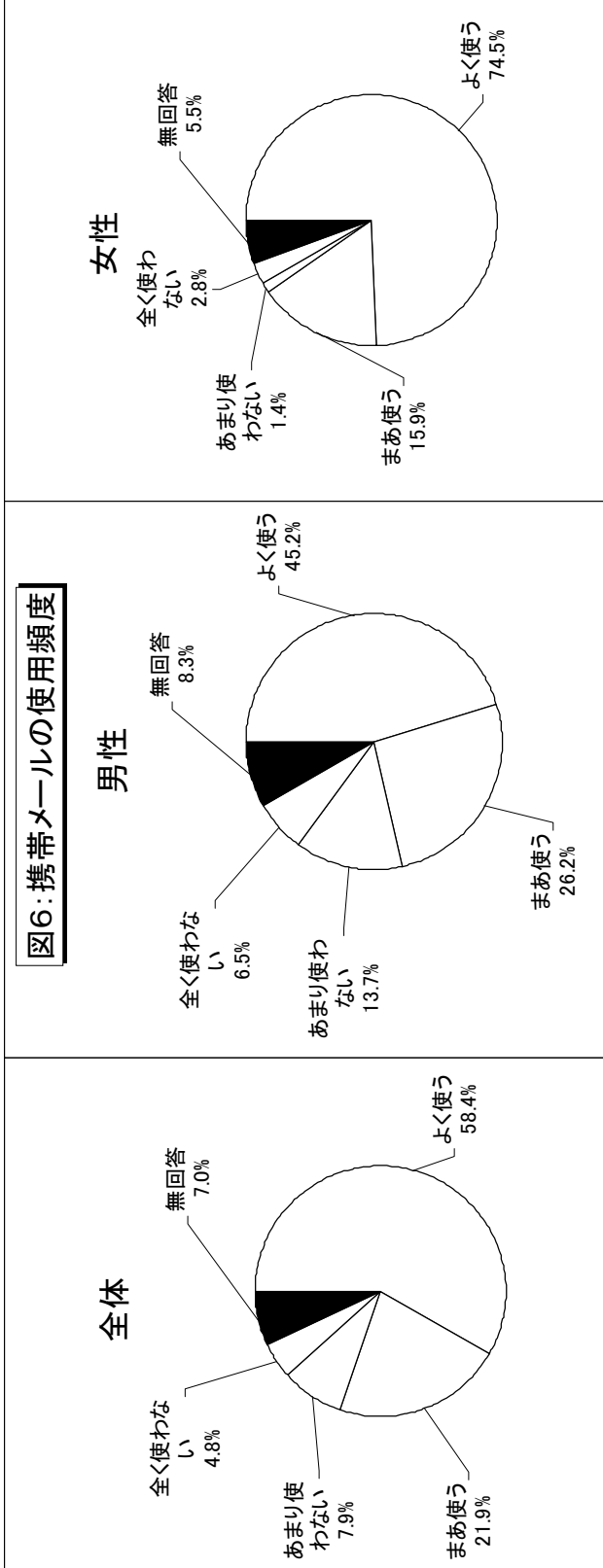
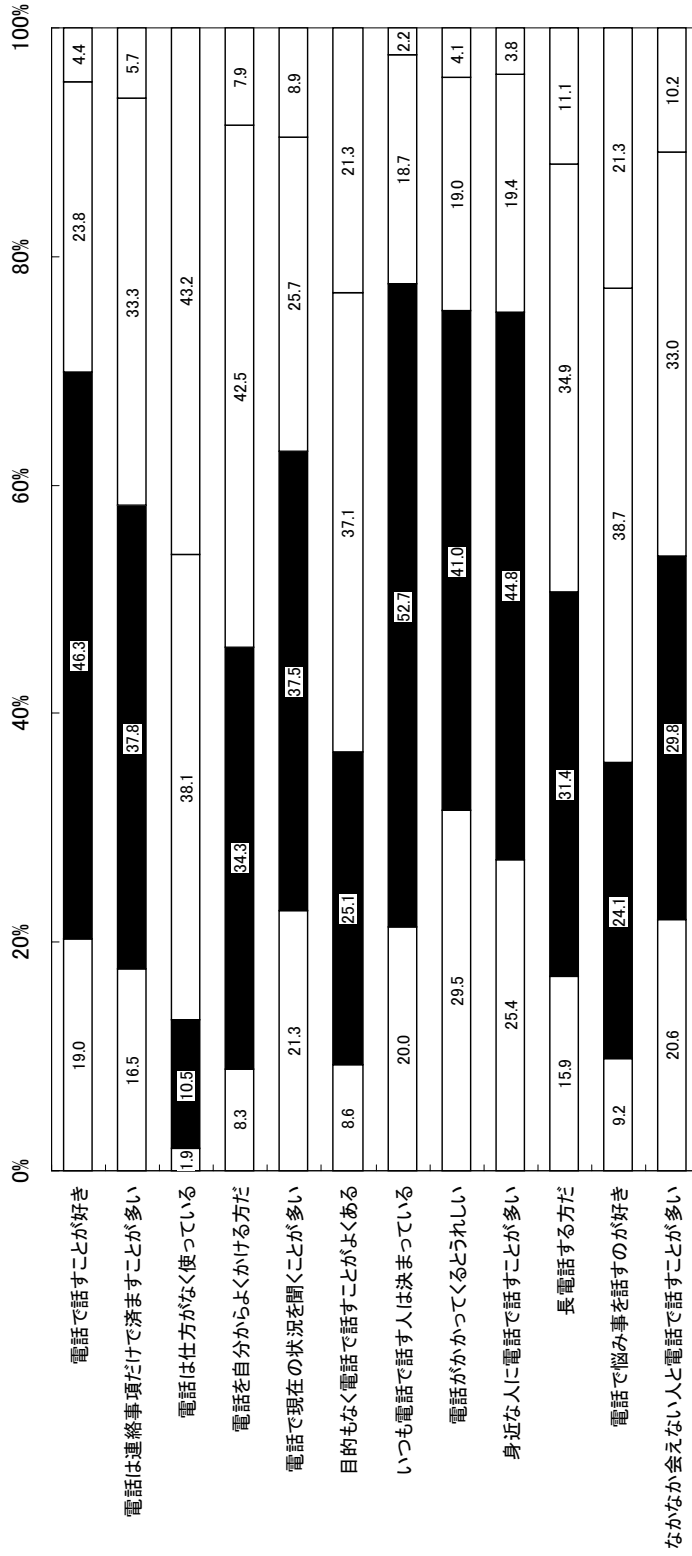
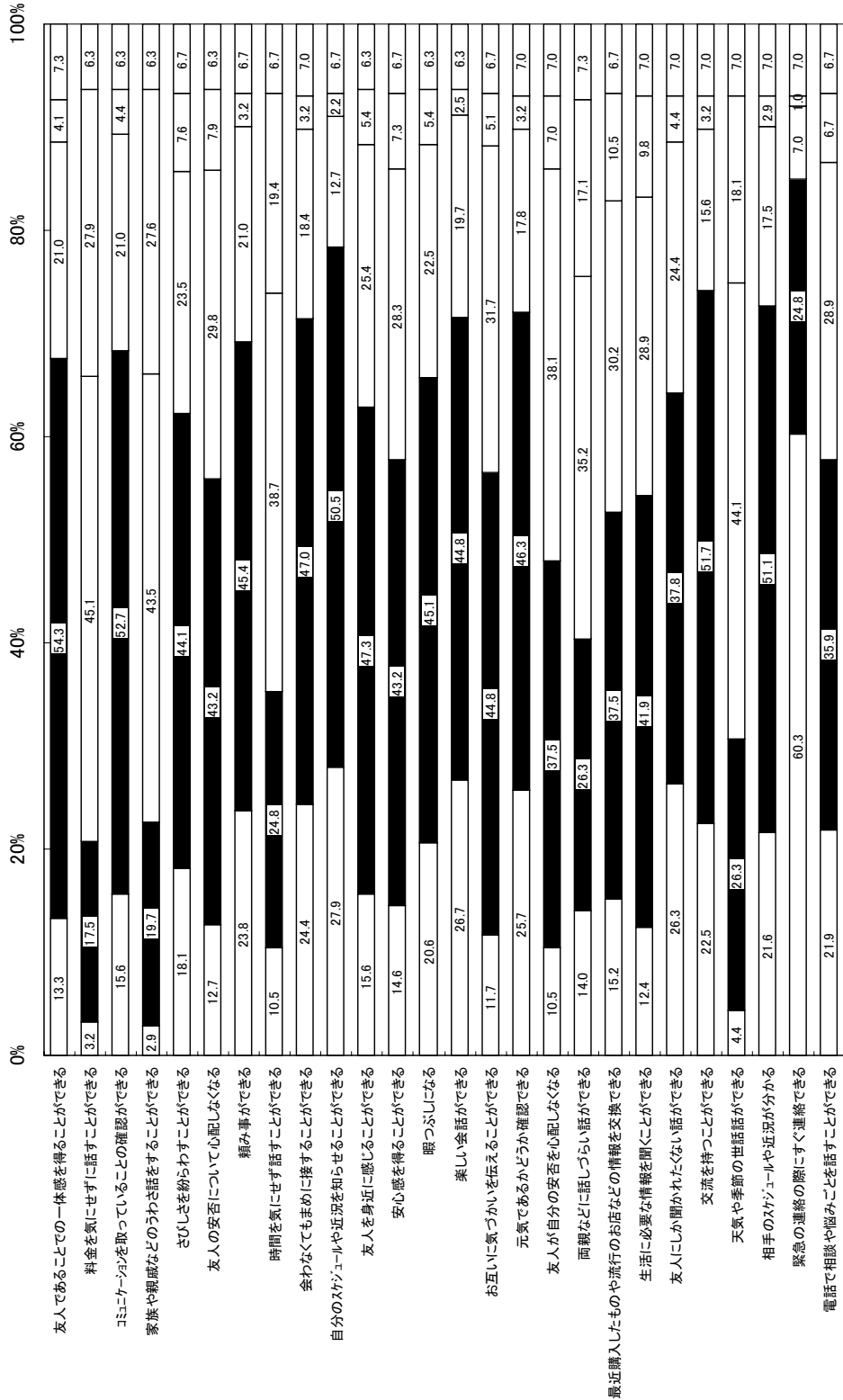


図7：携帯電話利用についての意識（複数回答）



□ よく当てはまる(%) ■ まあ当てはまる(%) □ あまり当てはまらない(%) □ 全く当てはまらない(%)

図8: 携帯電話利用についての満足度 (複数回答)



□ 非常に役に立つ(%) ■ まあ役に立つ(%) □ あまり役に立たない(%) □ 全く役に立たない(%) □ 無回答(%)

とが多い」「電話がかかってくるとうれしい」「電話で話すことが好き」であり、携帯電話はモバイルというよりパーソナルな利用意識が高い。

3. 1. 6 携帯電話利用に対する満足度

携帯電話利用に対する満足度(図8複数回答)は、「非常に役に立つ」に1点「全く役に立たない」に5点を与え、平均得点より意識が高い項目は「緊急の連絡の際にすぐ連絡がとれる」「自分の近況やスケジュールを知らせることができる」「元気であるかどうか確認できる」「楽しい会話ができる」「会わなくともまめに接することができる」であり、緊急時の連絡がとれ、近況を知らせることができ、会わなくともつながっているという意識において多くの満足を得ている。

3. 2 面接調査

3. 2. 1 女子専門学生の面接調査

〔出席者〕A、B：19歳、C：20歳、D：22歳、
E：28歳、F：30歳の6人

(1) いつ頃からどんな理由でケータイを持つようになったか

- ・高校3年。それまではPHS。持つようになったきっかけは、友達みんながケータイを持っていて、PHSからケータイにかける場合、ケータイからケータイにかけるよりも2倍位通話料が高かったから（A：19歳）
- ・高3の時、部活で帰りが遅くなるようになったので、家との連絡のため（B：19歳）
- ・高校卒業の時、卒業祝いに買ってもらった。みんな持っていたから（C：20歳）
- ・高校卒業して1年位たってから、友達が持っていて、自分だけ持っていないくて連絡とりづらかったから（D：22歳）
- ・1年前から、友人からぜんぜん連絡がとれないと言われたから（E：28歳）
- ・3年前から。友人との連絡を取りやすくする

ため（F：30歳）

(2) ケータイを持つようになって便利なところはどこか

- ・いつでもどこにいても連絡取れる（全員）
- ・家族、時間に関係なくかけられる（全員）
- ・携帯電話というより自分個人の電話という感じがする（全員）
- ・ケータイは主に待ち合わせの時よく使う（全員）
- ・ケータイがないときは、待ち合わせで待つのは30分が限度、ケータイを持つようになってからは何分、何時間でも待てる。来ることが分かっているから。待ち合わせの場所も時間もケータイがないときとくらべてルーズに約束できるのがいい。（全員）

(3) ケータイを持つ前の友達との電話、手紙の頻度はどのくらいか

- ・電話：1～3回/月（A、B：19歳、C：20歳、D：22歳）
1～2回/週（E：28歳、F：30歳）
- ・手紙：1～2回/月（A、B：19歳、C：20歳、D：22歳、F：30歳）
1～2回/週（E：28歳）

(4) ケータイを1日何回かけますか、1回につき何分話しますか

- ・1日5回未満、1回につき5分未満（D：22歳、E：28歳、F：30歳）
- ・1日5回未満、1回につき30分未満（B：19歳、C：20歳）
- ・1日10回未満、1回につき30分未満（A：19歳）

(5) ケータイで1日何通メールを出しますか

- ・1日5通未満（A、B：19歳、C：20歳、E：28歳、F：30歳）
- ・1日10通未満（D：22歳）

(6) まる1日ケータイを使わないことがあるか、

あるとしたらその頻度はどのくらいか

- ・ケータイを使わない日はない (A : 19歳)
- ・月に1~2日使わない (B : 19歳、C : 20歳、D : 22歳、E : 28歳)
- ・月に5~7日 (F : 30歳)

(7) ケータイに登録している友人の数は何人か

- ・50~100人 (C : 20歳、D : 22歳、E : 28歳、F : 30歳)
- ・150人位 (A、B : 19歳)

(8) 固定電話、ケータイ、ケータイメールの使い分けはするか

- ・使い分けする (全員)
- ・固定電話は、特定の人で悩み事など重い話、話が長くなる時、相手が確実に家にいるとき (全員)
- ・ケータイは親しい友人で、家族にでて欲しくないとき、声が聞きたくなかったとき、会うなどの約束するとき、緊急な用事があるとき (全員)
- ・メールは固定電話、ケータイよりプライベートな感じが強い、内容は軽い話、あいさつがわり、約束の確認、暇つぶし、メールは確実じゃないから万一届かなくてもいい内容 (全員)

(9) ケータイを忘れて出かけたときどんな気持ちになるか

- ・子供を忘れた気分で、不安でしょうがない (A : 19歳)
- ・忘れたことを引きずり不安になる (B : 19歳)
- ・孤立した気分 (C : 20歳)
- ・忘れたことを引きずらないけど連絡あったらこまると思う (D : 22歳)
- ・あまり気にならない (E : 28歳、F : 30歳)

(10) ケータイを持つようになって友人関係に変

化があったか

- ・「いつもつながっている」という感じがして安心感がある反面、それがわずらわしく感じることもある (A : 19歳)
- ・発信器をつけられているみたいで、監視されている感覚がある (C : 20歳、D : 22歳)
- ・ケータイという物では「つながっている」感じはしない (A、B : 19歳、E : 28歳、F : 30歳)
- ・ケータイの番号だけ教える人、メールアドレスも教える人と分ける。メールアドレスは親しい人でないと教えない (全員)
- ・ケータイを持つようになって、交友関係は広がったが、それによって友人関係が変わってきたとは思わない (全員)

3. 1. 2 男子大学生の面接調査

〔出席者〕G、H : 20歳、I : 21歳の3人

(1) いつ頃からどんな理由でケータイを持つようになったか

- ・3年前の冬、安くなったから (G : 20歳)
- ・高校のときはPHS、ケータイは今年の2月安くなったから (H : 20歳)
- ・去年の1月、家族との緊急連絡、非常用のため (I : 21歳)

(2) ケータイを持つようになって便利なところはどこか

- ・いつでもどこにいても連絡取れる (全員)
- ・携帯電話というより自分個人の電話という感じで使える (全員)
- ・ケータイは主に待ち合わせの時よく使う (全員)

(4) ケータイを1日何回かけますか、1回につき何分話しますか

- ・1日5回未満、1回につき5分未満 (G : 20歳、I : 21歳)

- ・ 1日20回未満、1回につき5分未満（H：20歳）

(7) ケータイに登録している友人の数は何人か

- ・ 20人位（G：20歳）
- ・ 10人位（H：20歳）

(8) 固定電話、ケータイ、メールの使い分けはするか

- ・ 会わない人にはケータイはかけない（G：20歳）
- ・ 友人とは会う連絡だけで、ほとんどやりとりしない（I：21歳）
- ・ ケータイは昔の固定電話と同じで、会うための連絡用（全員）
- ・ ケータイでは長話はしない、「どこにいる？」「今日ひま？」「会おうか？」といった短い連絡、なぜなら相手の表情、反応がわからないから（H：20歳）
- ・ メールはまったくやらない（G：20歳、I：21歳）
- ・ メールは一方通行で自分の感情を伝えるために、言葉や表現を考えるのがめんどろなのでほとんどしない。たまに縁が切れないようにあいさつがわりに出すときもある（H：20歳）
- ・ 女はケータイのない時代は結構手紙のやりとりしてたと思うけど、前から男は手紙書かない。だから、ほとんどの男はメールは使わないと思う。手紙は以前も今も年に1回だせばいい方だし。年賀状も出さない（全員）

(9) ケータイを忘れて出かけたときどんな気持ちになるか

- ・ ケータイがないと少し不安を感じるがまあなくてもいい（G：20歳、I：21歳）
- ・ ケータイがない生活は不安で、生きていけない（H：20歳）

(10) ケータイを持つようになって友人関係に変

化があったか

- ・ ケータイを持つようになって連絡は取りやすくなったけど、ケータイが友人との親密さに影響しているとは思わない。ケータイに関係なく親しい人とは親しい（全員）
- ・ ケータイは男同士では便利な道具だけど、男女間では監視装置になってると感じることもある（H：20歳）

4. 終わりに

若者の携帯電話に対する態度は「どこにいても連絡できる」といういわゆるモバイル性を重視する者は少なく、「特定の相手と容易に連絡できる」といういわば個人的通信手段という側面を重視する回答が多かった。行動の時間的制約が少ないという若者の生活状況からすれば、「常時」は便利ではあるものの、さして切実な問題とはなっていないことの結果と考えられる。若者の間では携帯電話の番号は非常に気軽に交換される傾向がある。しかしメールアドレスは事情が異なり、ある程度親しい関係の間に限って交換されている。メールの使用頻度が高い女子学生の場合、携帯電話の出現前から手紙文化があり、その代替手段として使用されていると考えられる。この種のメールは発信することに意味があり、返事はあまり期待していない。いわばメールは「ひとりごと」であると考えられるので内容は軽い。しかし「ひとりごと」は、自分自身の内面を見せることにもなるので、限られた親しい相手にしか出さなくなっている。メールアドレスを教えることに慎重になっているのはその結果と考えられる。携帯電話の番号は相手の性別に関わりなく儀礼的に交換し、教えた相手は「知り合い」と認知している。「知り合い」から発展して「友人」としてつき合うかどうかは、その後実際にかかってくるか、あるいはかけるかしてから「選別」して決めている。その意味で一定の選別が行われている。しかし

「かかってくる」という非常に受動的な基準で選別が行われていることは「広いが浅い」関係の形成を支持する結果であるとも言える。しかしながら、据え置き電話、携帯電話、メールとの使い分けや、携帯電話番号だけ教える相手、メールアドレスまで教える相手と選別したり、また「知り合い」から「友人」にするにも選別することに象徴されるように、若者の友人関係は総じて、「選別的」関係であると考えられる。また、男女とも深く交流する友人が増加したわけではなく、「知り合い」が増大していることが特徴である。本調査の回答者はいずれも「深い友人関係に変化はなかった」としている。これが実際に核となる人間関係は維持されていることなのかという点についてはさらに検討が必要である。

5. 引用文献

- 1) 「若者の友人関係と携帯電話利用」松田美佐 2000年 社会情報研究No 4 P111～121
- 2) 「親子関係における携帯電話の利用と満足研究」日吉昭彦、杉山 学 2000年 成城コミュニケーション学研究 第2号 P67～95